



# 第67回読売教育賞から 5 最終回

## 発達障害児の自信育む

「赤いコップは1杯7デ・杯。青いコップは18デ・杯。どちらの水が多いでしょうか」。東京都立川市立第七小の特別支援教室。菅原真弓教諭(61)と発達障害のある女子児童が、紙に書かれた問題を読み上げていた。

この児童は週一回、個別指導を受ける。通常学級では、数量の比較に苦手意識を持ち、板書の情報量が多すぎて混乱していたという。このため正答に必要な知識を最小限に絞り、紙や小型のホワイト



特別支援教室で児童を指導する菅原教諭(立川市で)

### 特別支援教育 最優秀賞 東京都立川市立第七小学校

ボードに書き出す。「単位をそろえれば、どちらが多いか分かります」。指導開始から30分が過ぎた頃、児童ははつきりとした口調で答えるようになった。

第七小では2016年度、特別支援教室の指導が本格化した。現在は近隣の2校を含めた計50人余りの児童を受け持ち、4人の教諭が指導に携わる。最大の特徴は通常学級の担任との情報交換だ。何につまずいたのか、どんな性格なのかなどを事前に把握し、特性に合わせて教え方も変える。

問題を解ける喜びを知り、自信を深めた児童たちは、通常学級でも意欲的になったという。菅原教諭は「まだスタートライン。これからも手助けしたい」と語る。

(中村守孝)

藤田和弘・筑波大学名誉教授「発達障害児の個に応じた長所活用型指導に取り組んだ。優れた実践であり、全国的なモデルになりうる。また、発達障害児の学習のみならず、通常学級の授業の改善もたらした」

### ◇ 谷川彰英座長に聞く

第67回読売教育賞は全13部門に150件の応募があり、9部門9個人・団体が最優秀賞に輝いた。選考委員会の谷川彰英座長(筑波大学名誉教授)に、今回の総括を聞いた。



谷川彰英座長

今回は150件もの多数の作品が寄せられただけに、全体的にハイレベルなものが多かった。入試改革を控えた高校の先生たちの頑張りが、特に選考委員の目を引いた。

中でもカリキュラム・学校づくり部門最優秀賞の福井県立武生高は、教科を横断した授業を実施する大胆な取り組みを見せてくれ

## 学ぶ教師によって学ぶ子育つ

た。「受験」にとらわれず生徒の知的好奇心をかきたてる内容で、今後の日本の教育はこうあるべき、かつ、こうなっていくであろうと確信させられた先駆的实践だった。

生徒自身が自分の学びを作り上げるためにこそ学校がある、という教育の原点でもある。

受賞にいたらなかった作品にも、将来への期待を感じさせるものが多数あった。さらに充実度を高めて、再チャレンジしてほしい。

新学習指導要領に沿った最新の流行を必ずしも追う必要はない。児童・生徒に本当に向き合っているか、質の高い教育を実践しているか、教育をさらに高めようという迫力に満ちているか、自問自答してほしい。学ぶ教師によって学ぶ子どもが育つものだから。

◆第68回(2019年)は13部門で募集  
【部門】①国語教育②算数・数学教育③理科教育④社会科教育⑤生活科・総合学習⑥健康・体力づくり⑦外国語・

異文化理解⑧児童生徒指導⑨カリキュラム・学校づくり⑩地域社会教育活動⑪N I E⑫幼児教育・保育⑬美術教育  
【期間】2019年8月を予定